

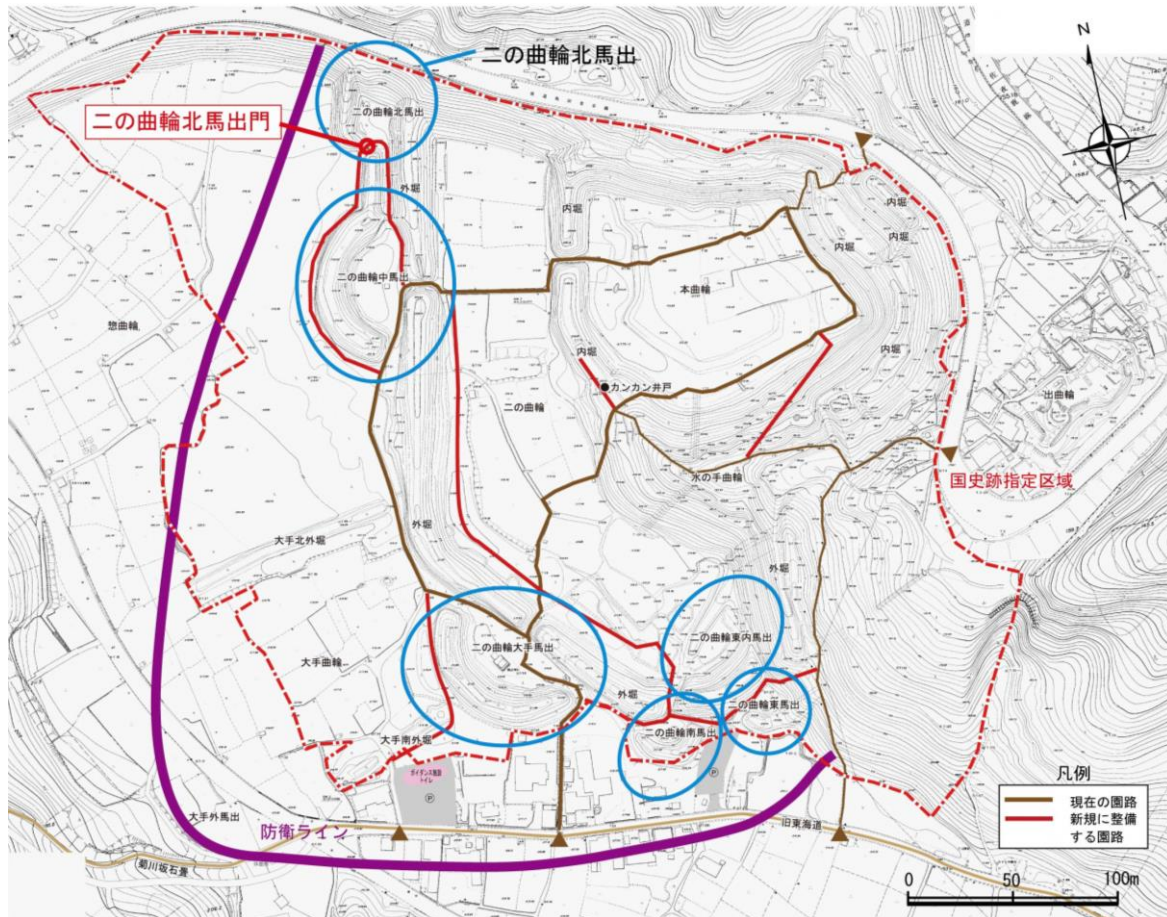
史跡諏訪原城跡保存整備

復元検討委員会資料

説明資料

1. 二の曲輪北馬出の現在の状況 1
2. 二の曲輪北馬出の本来の機能 2～3
3. 復元的整備の概要 4
4. 土塁と土塀の復元的整備（案） 5～6

1. 二の曲輪北馬出の現在の状況



二の曲輪北馬出の位置

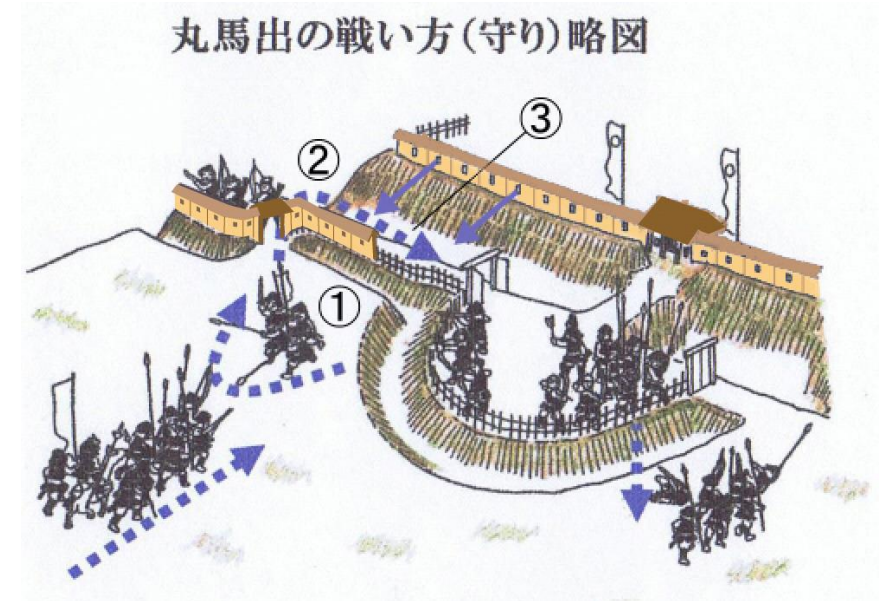
諏訪原城は、西側台地の平坦部分から敵が攻めてくることを予想し、二の曲輪外堀の外側に大小6つの馬出しをもうけ、強固な防衛ラインを形成している。二の曲輪北馬出は、これら最北端に位置する。



現在の状況

馬出門（薬医門）が復元されているのみで、見学者に二の曲輪北馬出や防御・攻撃機能が理解できない状況である。したがって、門周辺の一体となった整備が必要である。

2. 二の曲輪北馬出の本来の機能 [敵をおびきよせるワナ]



- ① おとり部隊が敵を二の曲輪北馬出前面におびきよせ、塀の狭間から攻撃する。
 - ② 敵兵が二の曲輪北馬出の塀の先に曲輪があると思いこみ、門を攻撃すると正面は崖で行き止まり。
 - ③ 先に進むには反転して一列になって、狭い通路を通る必要がある。その際二の曲輪から敵兵を一斉射撃する。通路脇に塀があると敵兵はどこにも逃げられない。
- 二の曲輪北馬出の門と土塁上の塀が一体となって守りと攻撃の機能を果たす。
したがって門の東側土塀は、北馬出内部の空間を目かくしし、北馬出へ敵をおびきよせるためのものであり、強固に造る必要はない。

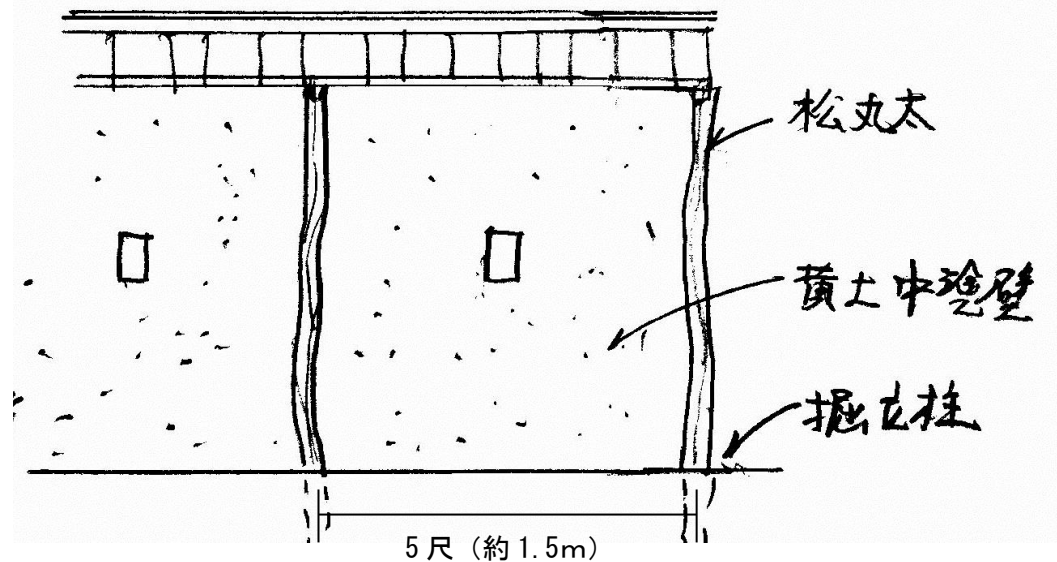
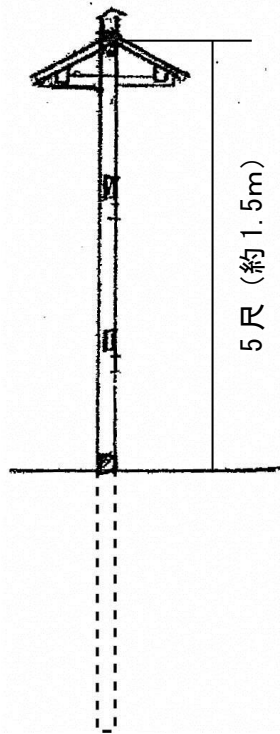
2. 二の曲輪北馬出の本来の機能

諏訪原城に本来想定されている土塀

中世の山城には、控え柱のない土塀が存在している。文献では、十二類合戦絵巻、秋夜長物語絵巻に土塀の様子が描かれている。

諏訪原城内では、本曲輪で土壁の破片出土事例がある。

県内の城の調査事例を見ると、久野城（3度折れを持つ土塀を検出）で5尺間隔の掘立柱の事例がある。また、柱穴の形状から丸太を使用したものと考えられ、控え柱は確認されていない。16世紀は、森林資源枯渇の時代で用材が不足していたため、掘立柱は、直径5cmから7cm程度の曲がった松の丸太を使用している。土塀は、竹小舞に粘土分の強い壁土を使用するため、耐用年数は3年から5年である。屋根は杉皮葺と考えられる。

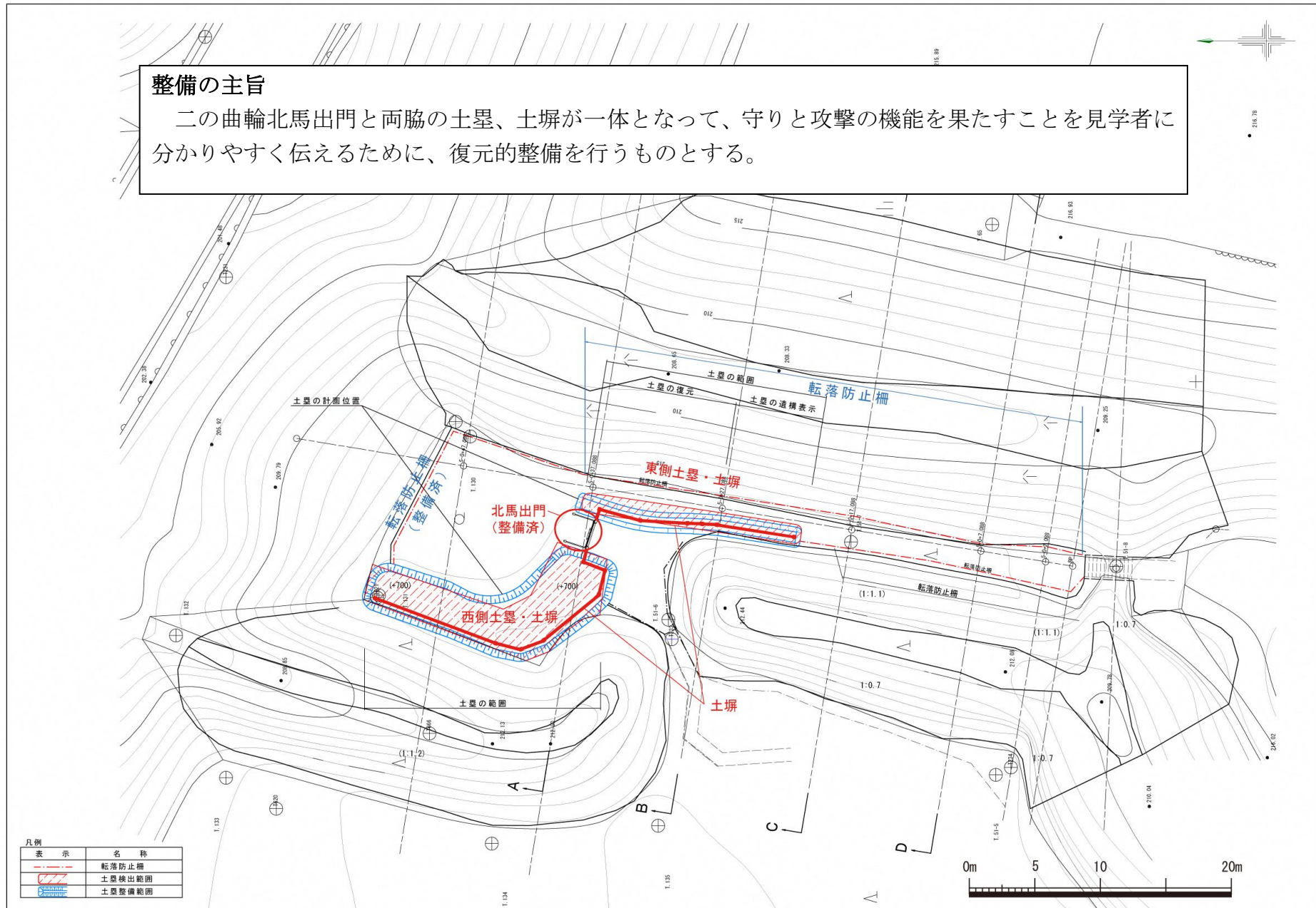


中世土塀の断面図と立面図のイメージ

3. 復元的整備の概要

整備の主旨

二の曲輪北馬出門と両脇の土塁、土塀が一体となって、守りと攻撃の機能を果たすことを見学者に分かりやすく伝えるために、復元的整備を行うものとする。



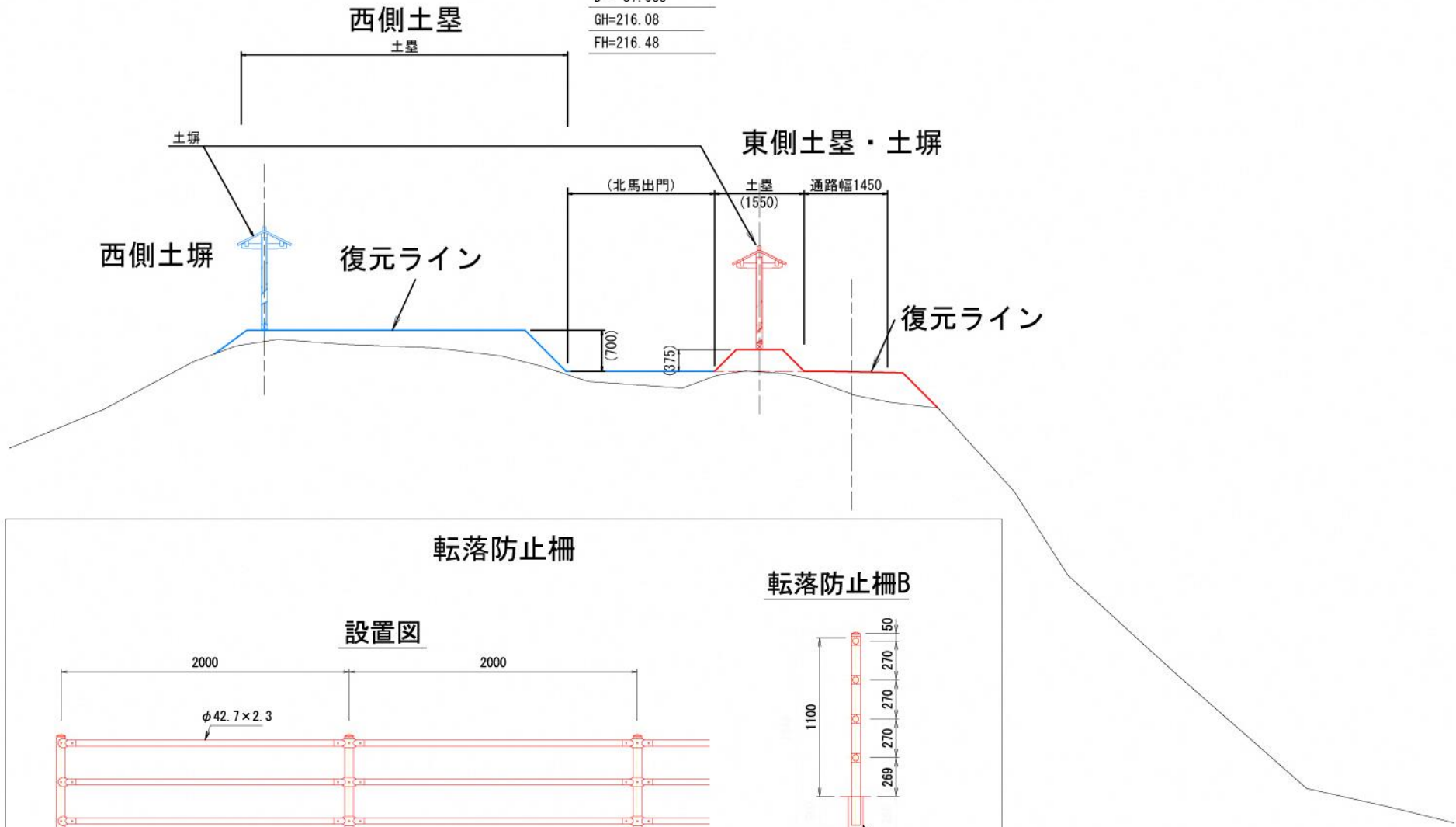
4. 土塁と土塀の復元的整備 (案)

A-A' 断面図 (5-0+37.08)

D = 37.088

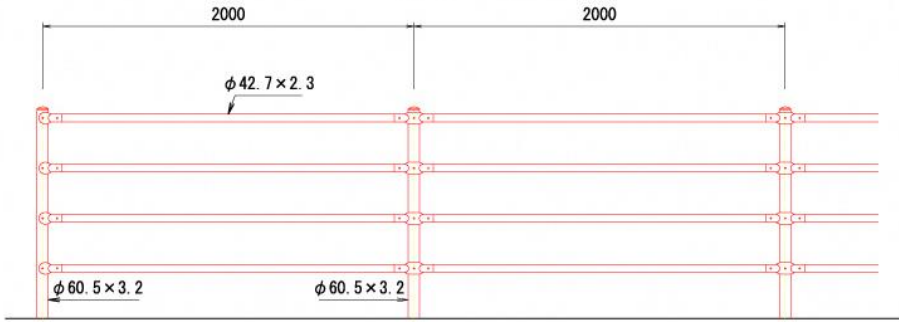
GH=216.08

FH=216.48

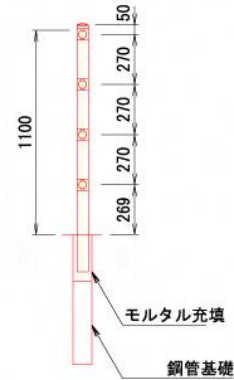


転落防止柵

設置図

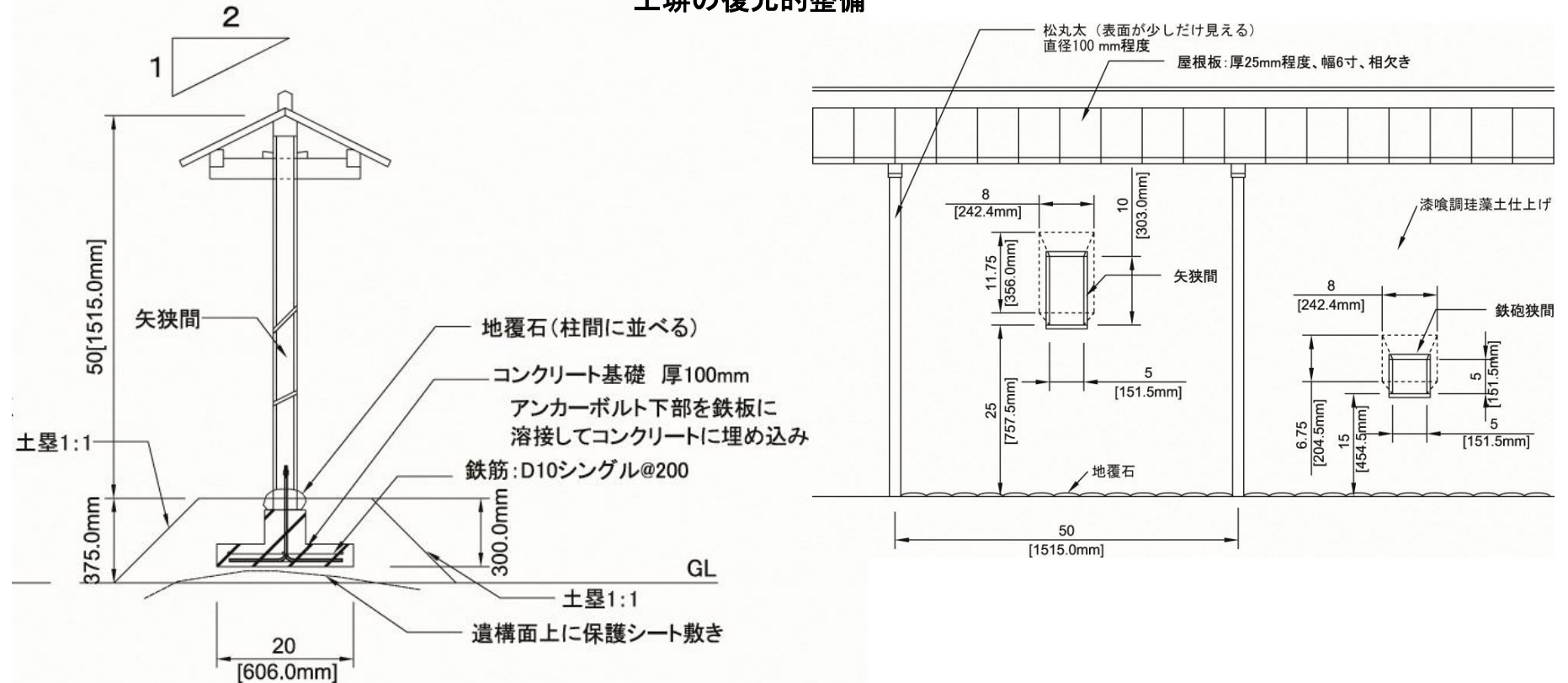


転落防止柵B



4. 土塁と土塀の復元的整備（案）

土塀の復元的整備



復元的整備の内容

中世土塀の復元をした場合、3～5年程度で掘立柱の取替えや屋根の修繕等が必要となり管理上の問題があるため、耐久性を考慮して、見え隠れ部分に現代的工法を併用した復元的整備を行う。

北馬出門の東側及び西側の土塁を想定される高さまで盛土する。土塀の基底部が地表のすぐ下に存在し、掘立柱穴の掘削を行うことができないため、土塀のコンクリート基礎を設置し柱を固定する。この場合、木材を地中に埋め込まないため、地中の湿気による柱材の腐食を抑え、耐久年限を延ばす効果が見込まれる。また、柱は戦国時代同様に直径10cm程度の丸太材を使用し、柱間は土壁塗りの代わりに間柱と貫を通して合板を張り、その上に漆喰調珪藻土を塗って仕上げる。屋根は本来杉皮葺きと考えられるが、耐用年限を考えて板葺きとし、その上に腐食防止のため鉄板を被せる。